

豊川市教育委員会 生涯学習課発行

発掘だより No. 30

平成 10 年 2 月 28 日 (土)

〒 442-8601 豊川市諏訪 1 丁目 1 番地

TEL (0533) 89-2158 (直)

三河国府跡第 9 次調査の概要

昨年までの調査で、SB501 (正殿) と SB502 (後殿) の位置や規模がほぼ判明していたため、今年度の調査目的としては、国庁内のその他の建物 (具体的には前殿、東脇殿、西脇殿など) や国庁の区画施設などの確認に主眼をおいて調査を行いました。

調査は昨年 12 月 9 日から 3 ヶ月ほどかけて行い、現在までにいろいろな事柄が判明し、当初の目的を達成しつつあります。

以下に確認された遺構ごとにまとめてあります。

・ SB501 (正殿)

国庁の中心的な建物で、確認された建物の中では、最大のものです。この建物には 3 期の変遷が考えられます。

SB501A (掘立柱建物跡) ⇒ SB501B (掘立柱建物跡) ⇒ SB501C (礎石建物)

建物規模は、礎石、根石等がほとんど残っていない SB501C は判然としませんが、SB501A と SB501B はほぼ同規模と考えられます。

桁行 (東西) 7 間 (22.70m) × 梁行 (南北) 5 間 (15.55m) の規模があります。

創建当初から瓦葺き建物であった可能性が高く、周辺からは三河国分寺系瓦よりも古くおかれる北野系の瓦 (8 世紀前半頃か?) が最も多く出土します。

・ SB502 (後殿)

正殿の北側に位置する東西に長い建物と考えられます。残念ながらそのほとんどは曹源寺本堂真下にあたるため、詳細については不明です。

この建物についても、正殿と同様な 3 期変遷が考えられます。

建物規模は、桁行 (東西) 9 間 (23.00m) × 梁行 2 間 (4.80m) と推定されます。

今回、VT の調査区から 2 箇所^の柱穴を確認しているため、総柱建物になる可能性が高いと考えられますが、全面がこのような状況であるかについては疑問が残ります。

なお、この建物の東西には国庁の北面区画施設が取り付きます。

・SB603 (西脇殿)
にしわきでん

Rトレンチ及びWトレンチで計6箇所^の柱穴を確認しました。南北棟の細長い建物になるものと考えられます。東西は2間ですが、南北はほとんどが調査区外にあたるため不明です。

確認された柱穴には1度建て替えの痕跡が認められますが、遺存状況が悪く、礎石の時期があったかは判然としません。

なお東脇殿については、その推定地が調査区外にあたるため、その状況は不明ですが、中軸線で折り返して、その位置はほぼ特定できます。

・SB602 (推定前殿)

Qトレンチにおいて3箇所^の柱穴を確認しましたが、そのほとんどは調査区外にあたるため、全容は不明です。

柱穴には建て替えの痕跡は認められず、比較的短い間存在した建物と考えられます。

出土遺物などから8世紀中頃を中心とした時期の建物と考えられ、9世紀までは下らないものと推定されます。

・SB601 (四面庇建物)
しめんびきしたてももの

Qトレンチにおいて確認された建物で、東西南北に^{ひきし}庇の取り付く建物です。

SB602に切られ、同じ調査区内にある7世紀中頃の竪穴住居跡を切っていることから、7世紀末～8世紀初頭頃の建物になるものと考えられます。

国庁の建物群とは主軸を同じくしない点や、時期的に少し遡ることなどを考えると国庁には直接関連しないものと推定されますが、前身の建物として興味深い性格を持っています。

・北面及び西面区画施設 (SA601・SA602)

Oトレンチ、Pトレンチ、Tトレンチにおいて区画施設を検出しました。

国庁の区画施設と考えられ、これによれば国庁の東西規模は65.40mになります。柱間は、北面のSB502に接続している部分のみ8尺で、そのほかはすべて9尺の均等間隔で構築されています。

構造については、板塀の可能性が最も高く、柱掘り方が深く、丁寧な^{じぎょう}地業を行っている点などを考えると、非常に規模の大きな区画施設といえます。

・出土遺物

今回の調査でも国府に関連する遺物が多数出土していますが、その前後の時期の遺物も豊富にみられ、合わせると膨大な量になります。

その出土遺物のなかで注目されるものとしては、陶製印と墨書土器が挙げられます。

陶製印

国庁区画の北東に位置するNトレンチの廃棄土坑SX602から出土しました。

緑釉製りよくゆうせいの一辺約5.0cmの角印で、「賀□□□」くにのくりやと読めます。一緒に出土した遺物などから、廃棄されたのは10世紀中頃と推定されます。

墨書土器

明らかに判読できる墨書土器は今回の調査では2点のみの出土です。

1点は、国庁北西コーナーに近いPトレンチの廃棄土坑SX201から出土した須恵器すえきで、「国 厨くにのくりや」と読めます。9世紀前半頃と推定されます。

もう1点は、陶製印と同じSX602から出土した灰釉陶器かいゆうとうまで、同じく「国厨」と読むことができます。こちらは10世紀中頃のものと考えられます。

昨年の調査で出土した3点を合わせると、「国厨」の墨書土器は5点を数えます。出土地点は、国庁の北側に集中するため、この地点の付近に国厨院くにのくりやいんが存在した可能性を指摘できます。

・国庁の存続期間

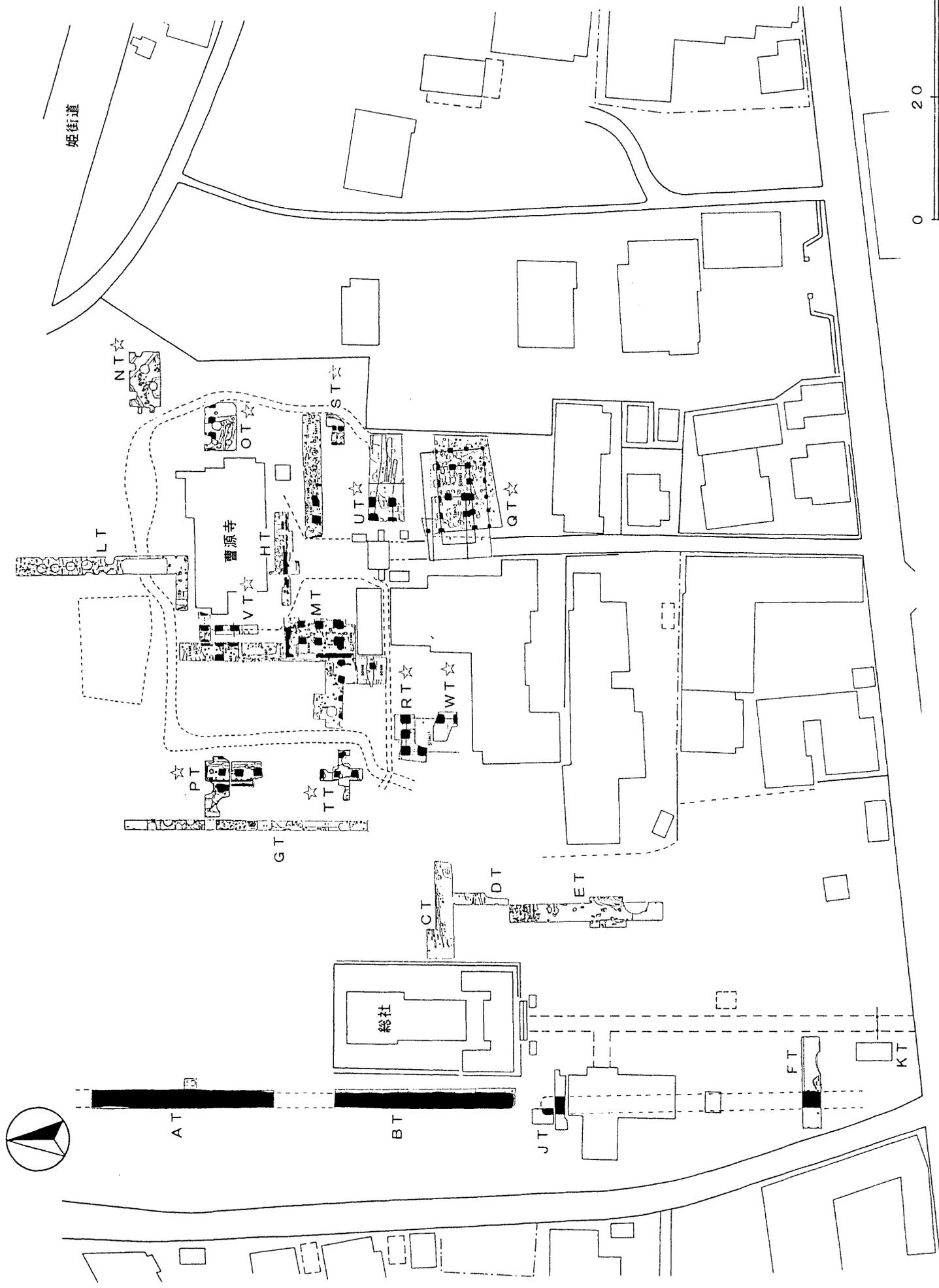
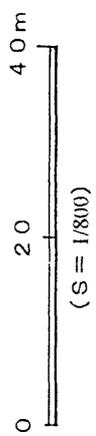
上限については出土遺物が少ないため、やや判然としませんが、8世紀前半頃（ただし、第1四半期までは遡らない）と考えられます。

下限は、国庁内に数多くの廃棄土坑が掘られる時期があり、この時期を国庁の廃絶時期と考えています。具体的には10世紀中頃から後半にかけての時期と思われます。

・まとめ

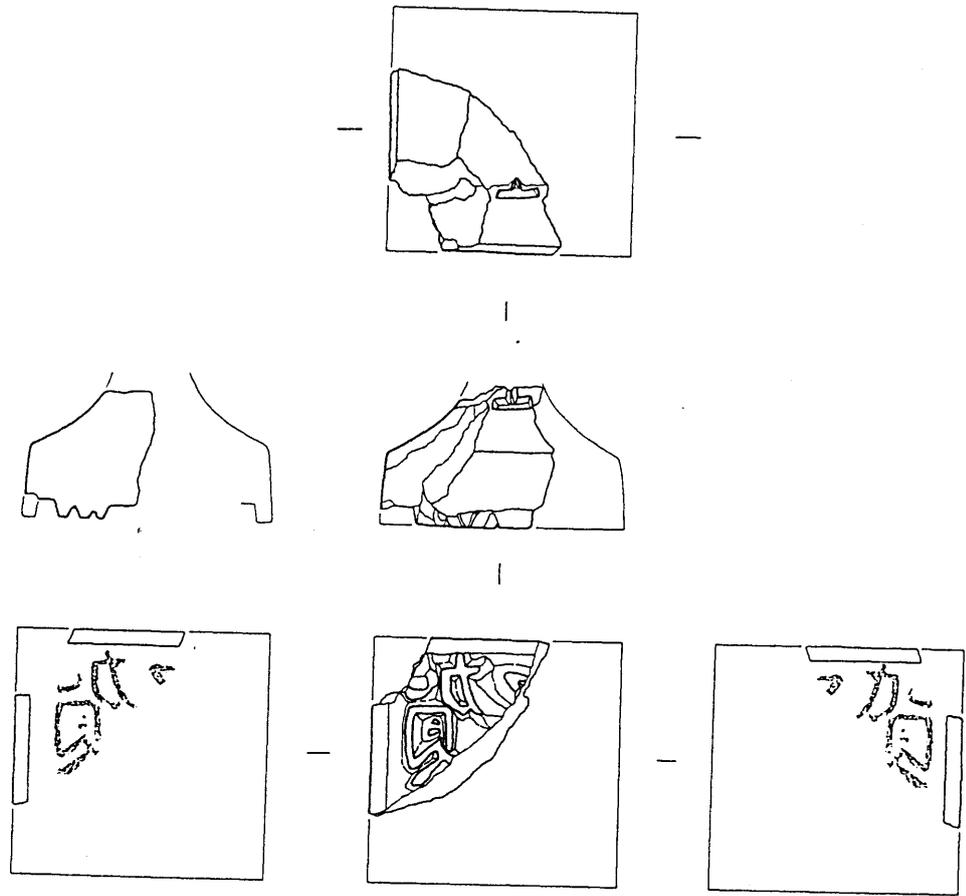
7年に及ぶ調査の結果、ほぼ国庁の位置や構造が明らかとなり、当初の目的を達成することができました。これも町内の方々や曹源寺、総社関係者の方々のご協力があったからこそと考えております。本当にありがとうございました。

国庁周辺の調査は今年度で終了しますが、来年度からは豊川西部土地区画整理地区内で国府跡の調査を行っていきます。今後ともよろしくお願いいたします。

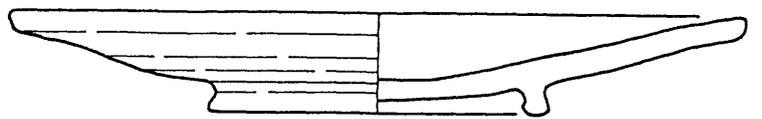
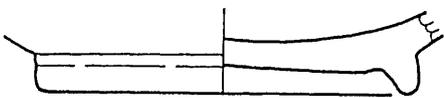


☆は今回の調査区

調査区全体図



S X 6 0 2 出土陶製印 (S = 2/3)



S X 6 0 2 出土墨書土器 (S = 2/3)



S X 2 0 1 出土墨書土器 (S = 2/3)